

# 新統古今和歌集

## 卷第三

夏歌

夏歌の中に

従二位家隆

かやり火のつれなき比の下もえを  
心よわくもゆ蛩かな

貞和百首歌に

前大納言公泰

山かげのくらきかたよりみえそめて  
なつみの川にとぶほたるかな

ほたるをよめる

源光正

おもひせく心しられて滝つせの  
中なるよどにとぶほたるかな

弘長元年百首歌に

後九条前内大臣

とぶ螢いはもる水にやどる夜は

思ひやいとどわきかへるらん

住吉社によみたてまつりし歌の中に、水辺螢藤原雅親

池水のいひいでがたき思ひとせ

身をのみこがす螢なるらん

左大臣よませ侍りし新玉津島社三十首歌に、紅螢  
前撰政左大臣

螢とぶほり江の波のよるいとと

しくてふ玉の数やそふらん

権中納言雅世家にて、人人三首歌よみ侍りけるに、蛩を  
源持之朝臣

秋ちかきまがきの草の露までも

猶数みえてゆく蛩かな

卷第十七

雑歌上

応永十一年内裏にて人人題をさぐりて三十首歌つかうまつ  
りける時、沼蛩 前大納言為伊

うき草の風にただよふ沼水に

影さだまらでとぶほたるかな

だいしらず よみ人しらず

夜ならでもゆともみえぬ蛩かな

いかにしのぶる思ひなるらむ

応永十六年9月十三夜内裏にて人人題さぐりて百首歌  
つかうまつりけるとき、寄月往事を

後三条入道前太政大臣

むかしみし螢の影はなにならで

我が世の月ぞ窓にかたぶく

「国歌大観」より